

## 仏教とキリスト教

真鍋舜治 2010年4月28日

(2009-11-22 講演、2010-3-16 「はこぶね」 投稿)

### 目次

1	まえがき	p.1
2	仏教の歴史	p.2
3	般若心経の世界	p.7
4	浄土教の世界	p.8
5	神道・儒教・やまと教	p.10
6	むすび	p.13

### 付録

付1	梁塵秘抄	p.13
付2	二宮尊徳	p.14
付3	中江藤樹	p.15
付4	親鸞上人と正信偈	p.20
付5	ヒルティの思想	p.22

文献	p.23
----	------

### 概要

明治時代のキリスト教の指導者、新島謙、海老名弾正、内村鑑三、新渡戸稲造、植村正久などは、儒学の深い教養をもち、また武士道やその根拠になった陽明学をよく体得していた。その伝統の上にキリスト教を接木したので、西洋人を感服させることができたのである[25][26]。しかし不幸なことに明治時代を通じての皇国史観が正しい歴史を曲げてしまった。教育勅語にしても儒教の真の教え伝えていないし、修身の国定教科書に紹介されている、中江藤樹にしても二宮尊徳にしても、本当の姿を伝えていない。

したがって敗戦とともに皇国史観が取り除かれ、正しい歴史が語られるようになったことは、大変喜ばしいことであるが、皇国史観が現れる前の日本の優れた歴史もかえりみられなくなったことは大変残念である。これらの歴史・思想は、仏教・儒教の陽明学・神道のエッセンスを含み、世界的な広がりをもつ普遍的な思想であって、日本人にとって、旧約聖書以上の力をもつ。これらの歴史から離れると、日本のキリスト教は、根無し草のような浅薄なものになる。これらについて紹介し、明治時代のキリスト者の伝統をよみがえらせ、生き生きとしたキリスト教を復活させることを強く願うものである。

## 仏教とキリスト教

### 1 まえがき

外国人からの聞かれて一番困るのは、「日本人の宗教は何か」という質問である。彼らにとって宗教を持たない人間は、動物と同じと考えるからである。最近この質問にあって、とっさに「プロテスタントのキリスト教から聖書を引算したものです」と応えた。あとで考えるとなかなか的をついた答えだと思っている。

日本の宗教はと問われると、大抵の日本人は困惑する。西洋のように定義のはっきりした宗教がないからである。日本では「神道」「仏教」「儒教」が並存して、それぞれの特色を発揮しながら、深い宗教心と倫理を育んできた。二宮尊徳は、神道を「開国の道」、仏教を「治心の道」、儒教を「治国の道」と呼んでいる[10、上、p.36]。すなわち神道は「創造と生の営み」を、仏教は「永遠の命と慈悲の心」を、儒教は「社会の秩序と倫理」に重点をおきながら、お互いに深く協調しあって、日本の伝統を形成してきた。実際明治維新で明治政府が無理な廃仏毀釈をおこなうまでは、神社と寺院は共存していたのである。この様な特別な宗教は名前のつけようがないから、ここでは「やまと教」と呼ぶこととする。

やまと教を理解するには、「二宮尊徳」の思想と生き様を考えるのが一番分かり易いと思う。それが「二宮尊徳」の思想と生き様に凝縮されているからである。天の万物生成の恵みを、自然を通じて豊かに肌で受け止め、天にならった豊かな慈悲心で人々に接し、天の万物生成の業にならい、工夫をこらして、生産の業にいそしむ。支出は収入の範囲とし、余分の蓄積は社会のために用いる。また天の恵みを真に理解するために、科学的な探究心を忘れない。これは正にマックス・ウェーバの「プロテスタニズムの倫理と資本主義の精神」の世界で、まさに「プロテスタントのキリスト教から聖書を引算したもの」となる。

2006年8月国際二宮尊徳思想学会で大連に行ったとき、歓迎会の席上日本人が集まって歌を披露した。そのとき著名な宗教学者の山折哲雄先生が中心になり、皆で手をつないで「夕焼け小焼けで」を歌った。ここでは「夕暮れ」「寺の鐘」「手をつなぐ」「鳥と一緒に」「憩い」「月」「星」「夢」など、「真の平安」が美しく歌われており、これこそ「やまと教の讚美歌」ではないかと思った。お寺の作務衣を着た山折先生の素朴な姿とともに、生きた「やまと教」の表現を感じた。

仏教とキリスト教を考えると、仏教だけでなく、この「やまと教」を含めて考えることが必要と思われる。仏教だけでは、国民文化の中心としての宗教としては、重要部分が欠落しているからである。また仏教と思われているものも、よく見ると神道の影響を濃く残している。

また一般に**宗教の比較**を行うとき、キリスト教の言葉で言えば、「主」「聖霊」「戒め」について、どのように考えているかを調べると、分かり易い。また**宗教の目的は**、放っておけば万人が万人と戦う社会に、共存のための秩序を与えることにあるが、この秩序には、「心の秩序」と「社会の秩序」があり、その宗教がこの両者にどのようなバランスを与えているかで、その特性がきまるようである。

## 2 仏教の歴史

紀元前5世紀インドでは祭事を司る支配階級バラモンとは別に、サマナ（沙門）といわれる出身、出自をとわない自由な立場の思想家、宗教家、修行者らがあり、仏教はこの文化を出発点にしている。発生当初の仏教の性格は同時代の孔子などの諸子百家、ソクラテスなどのギリシャ哲学者らがしめすのと同じく、従来の妄信的な原始宗教から脱しようとしたものと見られ、とくに初期経典からそのような方向性を読み取れる。

当時の**世界的な時代背景**は、都市国家がある程度の成熟をみて社会不安が増大し、従来のアニミズム的、また民族的な伝統宗教では解決できない問題が多くなった時期であろうと考えられており、医学、農業、経済などが急速に合理的な方向へ発達し始めた時期とも一致している

紀元前5世紀頃（500～400BC）に**釈迦**が現在のインド北部ガンジス川中流域で提唱した（初期仏教）。釈迦が死亡（仏滅）して後、出家者集団（僧伽、サンガ）は個人個人が聞いた釈迦の言葉（仏典）を集める作業（結集）を行った。佛典はこの時には口誦によって伝承され、後に文字化される。釈迦は人生は「苦」であるが、その実体を正しく知ることで、これを超克することができる」と説いた。

**仏滅後100年**ごろ、僧伽は教義の解釈によって上座部と大衆部に大きく分裂する（根本分裂）。時代と共に、この二派はさらに多くの部派に分裂する。この時代の仏教を**部派仏教**と呼ぶ。部派仏教の上座部の一部は、スリランカに伝わり、さらに、タイなど東南アジアに伝わり、現在も広く残っている（南伝仏教）。南伝仏教は戒律を重んじ、現在も社会の骨格になっている点が、中国を通して渡来した日本の仏教と大きく異なる。

**紀元前後**、在家者と釈迦の墓（仏塔、ストゥパ）の守護者たちの間から、出家することなく在家のままでも仏となる教え（**大乘仏教**）が起こる。この考え方は急速に広まり、アフガニスタンから中央アジアを経由して、中国・韓国・日本に伝わっている（北伝仏教）。紀元前後、出家することなく在家のままでも仏となる教え、大乘仏教（北伝仏教）が起こった。これは中央アジアで、キリスト教やゾロアスター教の影響を受けている。2世紀のイ

インド僧竜樹が祖師と考えられ、また 4 世紀の鳩摩羅什、7 世紀の玄奘三蔵によって経典が漢訳され、中国でさらに発展を続けた。大乘仏教では、永遠の存在、人智を超えた存在としての仏、衆生を救済する仏の慈悲、これに応答する信心、死後の極楽浄土が説かれていて、釈迦の教義に多くのものが付加されている。

7 世紀ごろベンガル地方で、ヒンドゥ教の神秘主義の一潮流であるタントラ教と深い関係を持った**密教**が盛んになった。この密教は、様々な土地の習俗や宗教を包含しながら、それらを仏を中心とした世界観の中に統一し、すべてを高度に象徴化して独自の修行体系を完成し、秘密の儀式によって究意の境地に達することができ仏となること(即身成仏)ができるとする。密教は、インドからチベット・ブータンへ、さらに中国・韓国・日本にも伝わって、土地の習俗を包含しながら、それぞれの変容を繰り返している。

8 世紀よりチベットは僧伽の設立や仏典の翻訳を国家事業として大々的に推進、同時期にインドに存在していた仏教の諸潮流を、数十年の短期間で一挙に導入した(チベット仏教)。その後チベット僧侶の布教によって、チベット仏教はモンゴルや南シベリアにまで拡大していった。

中国には**紀元後 1 世紀に大乘仏教**が伝わった。しかしこれは、原始インド仏教の忠実な継承にこだわることなく、戒律や教義解釈などで独自の発展を遂げた。特に 4 世紀における鳩摩羅什(クマーラジーヴァ)の翻訳による漢訳仏典の充実は、漢字を共通の国際文字として使用する周辺諸国への北伝仏教の拡大に大きな影響を及ぼすことになった。北魏の孝文帝や「皇帝菩薩」と称せられた梁の武帝など、仏教拡大に熱心な皇帝も現れ、周辺諸国への普及も加速した。

古代朝鮮へは、高句麗に 372 年に、百済には 384 年、さらに新羅へは 5 世紀(400~500 年)のはじめに伝来したといわれる。

日本への伝来は日本書紀に依れば 552 年といわれている。**聖徳太子**(574~622 年、48 歳)は仏教に帰依し、その文化のもとに政治の改革につとめた。憲法 17 条を制定し、また三教義疏[法華経、勝鬘経、維摩経の注釈書]を執筆するほど、仏教に精通していた。法華経は観音菩薩の慈悲を説き、勝鬘経は勝鬘夫人の布施の心を説き、維摩経は維摩大士の空の観念を明らかにしているもので、この三経は仏教を真髄をバランスよく表現しているように思う。その意味で聖徳太子の仏教は、後世の仏教よりキリスト教に近いのではなかろうか。

**飛鳥時代**(592~710 年)には、天智天皇(626~672 年、46 歳)の大化の改新(645 年)、百済救援軍の白村江(662 年)での大敗など多難であった。しかし**奈良時代**(710~794 年)に

なると、仏教は国家の中樞の働きをするようになる。仏教とともに渡来した漢字と漢文による文書化の技術は、高度な国家運営の基礎技術である。また金属冶金の技術は、貨幣の鑄造を可能にし、農具・木工道具・武器を作ることを可能にした。また仏像を製作して民の心を治めることにより、国家の統合を可能にした。古事記（712年）、日本書紀（720年）もこの時代に編纂されている。聖武天皇（701~756年、55歳）は深く仏教に帰依し、災害・疫病から民をすくうため東大寺大仏の建立の詔を発した（741年 40歳）。大仏の開眼供養は11年後に行われた（752年、51歳）。また唐僧・鑑真が来日している（754年、53歳）。この時期仏教はそれがもたらした文化とともに、国家の発展に大きな役割を果たしている。

奈良時代（710~794年）の仏教も時間の経過と共に制度化し、寺院が不当な経済力をもつようになり、国政の妨げになるようになった。そのため桓武天皇（737~806年、69歳）は京都・平安京に都を移した（794年、56歳）。この平安時代（794~1192年）には、仏教文化が日本の社会の隅々まで染みとおり、末期を除いておよそ350年の平和の時代を実現した。この時代の仏教を代表する者は、高野山を開いた弘法大師空海（774~835年、61歳）と比叡山を開いた伝教大師伝教最澄（767~822年、55歳）で、何れも遣唐使について入唐し新しい仏教をもたらした。とくに空海は真言密教をもたらしたが、これはヒンドゥ教の神秘主義に関係しており、大日如来を中心とした統一した世界観をもち、修行と儀式により佛となる（即身成仏）ことができるとしている。仏が自分の中におり、自分も仏の中にいる[6, p 127]ということを実感できることであり、これはヨハネの手紙1、4:13を思い出させる。

「神はわたしたちに、御自分の霊を分け与えて下さいました。このことから、わたしたちが神の内にとどまり、神もわたしたちの内にとどまってくださることが分かります。」

空海は仏教を国の中心におき、それにより仏の国を実現しようとした。これは朝廷の要請により満濃池の改修を指揮した（821年、47歳）こと、私立の教育施設「綜芸種智院」を開設し、貴族のみならず庶民にも解放した（828年、56歳）こと、天皇の心身の安寧のために宮中に真言院を造った（834年、60歳）ことから、窺い知ることができる。また当時の僧は国家公務員であり、その資格の戒を与える灌頂道場を高尾山寺に開いている（812年、45歳）。空海の事跡は、貯水池として現在も大きな役割をはたしている讃岐の満濃池、戦国武将達が恩讐を超えて永遠の憩いに入っている高野山に残されており、また空海の心は「同行二人」と書かれた傘を被って廻る「お四国遍路さん」の心に伝わっている。池田首相が難病の末、命懸けで四国遍路をして快癒し、「寛容と忍耐」のもとに、日本経済の復興に成功したことも思い出される。空海は今も生きているのである。

平安時代も中期になると社会の矛盾が広がってくる。第一には人口増加により、耕作しやすい土地が少なくなってきたこと、第二には土地所有が固定化し貧富の差が激しくなっ

てきたこと、第三には学問の普及と共に、文章に卓越した官僚の力が相対的に低くなったことが挙げられよう。その頃になると寺院も特権階級化して、仏教の本質から外れてくる。

**源信**（942～1017年、75歳）は藤原時代中期の人で、御堂関白と言われた藤原道長（966～1028年、62歳）より24年早く生まれている。学問に優れ、956年14歳のとき、「称讃浄土経」を講じ、村上天皇により法華八講の講師の一人に選ばれる。そして、下賜された褒美の品（布帛〈織物〉など）を故郷で暮らす母に送ったところ、母は源信を諫める和歌を添えてそのその品物を送り返した。その諫言に従い、名利の道を捨てて、横川の恵心院に隠棲し、念仏三昧の求道の道を選んだ。

母の諫言の和歌 「後の世を 渡す橋ぞと思いに 世渡る僧と なるぞ悲しき。  
まことの求道者となり給へ。」

源信は、阿弥陀如来への真の信仰による魂の救いを求める、浄土教（浄土宗、浄土真宗）の開祖と考えられている。その後100余年に編纂された梁塵秘抄[付1] から見ても当時既に民間では、「寺院仏教」ではなく、「こころの仏教」の萌芽が見られる。源信は紫式部の源氏物語のなかで「横川の僧都」のモデルになっている。

平安時代後期（11世紀後半から12世紀）になると、土地所有の形態が重層的に複雑になり、収税権をもつ朝廷・貴族と、土地に密着している武士層ができたが、末端の武士層の力がましてきて、社会が不安定になってきた。そして保元の乱（1155年、平治の乱（1159年）を経て、戦乱の時代にはいり、鎌倉幕府の成立（1192年）で小康を取り戻すことになる。このような戦乱のほかには自然災害や伝染病のため、一般庶民は生活に苦しんだ。

**法然上人源空**（1133～1212年、79歳）はこの時代に浄土宗を開いて、民衆に阿弥陀如来の救いを説いた。法然は岡山県の武士の家に生まれたが、敵に夜襲をかけられ、9歳のとき父を失っている。この時父は死の床にあって法然に遺言した。[15, p7]

「お前は決して敵をうらんではない。これは先の世から定められている業であって、私が受けなければならぬものなのだ。もしお前が敵をうらんでこれを討てば、敵の子孫はまたお前をうらんで討とうとするであろう。そうすれば、このうらみによる血の争いは絶えることなく続くこととなろう。お前は一日もはやくこの憎しみと争いと闇の修羅の巷を離れて、私の冥福を弔い、ゆるしと光との境地に入ってくれ。」

これはマタイ福音書 5：43～48 のイエスの言葉を思い出させるものである。

「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくな

い者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるだろうか。徴税人でも、おなじことをしているではないか。自分の兄弟にだけに挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるだろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」

法然はその天才的な宗教的素質を認められて、比叡山で修行することになったが、当時の比叡山では俗世間とは違った意味での、僧侶の世界内での権力争い、立身出世主義が横行していた。法然はこれを避けて、18歳のとき比叡山の黒谷に移り、真の教えを求める求道の生活にはいった。このとき一切経を五回読んだといわれる。1175年(42歳)のとき、善導の「観無量寿経疏」により念仏に導かれ、比叡山を下りて東山吉水に住み、念仏の教えを広めた。この1175年が浄土宗の立教開宗の年とされている。

**親鸞**(1173~1263年、90歳)は法然より40年おくらせて生まれている。1181年(8歳)で、京都青蓮院で後の天台座主・慈円のもとで得度し「範宴」と称した。伝説によれば、慈円が得度を翌日に延期しようとしたところ、わずか8歳の範宴が

「明日ありと思う心の仇桜、夜半に嵐の吹かぬものは」

と詠んだという。無常感を非常に文学的に表現した歌である。親鸞は20年にわたり比叡山で修行した。この時代1192年に源頼朝が征夷大將軍に任じられ、鎌倉時代に移る。親鸞は1201年、28歳で比叡山と決別して下山し、聖徳太子の建立とされる六角堂へ百日参籠を行うが、95日目の暁の夢中に、聖徳太子(救世観音の化身)が示現され、

「あなたは、今まで坊さんたるものは妻をめとしてはならない、と禁止されていた伝統の戒律を、今こそやぶらなければなりません。私は玉のような美しい女性となり、あなたの妻になりましょう。そして、一生の間、よくあなたの活動をたすけ、いのち終わるとき、私の生涯はこれで十分であったと、心から喜べるようになる極楽浄土と一緒にまいりましょう。」とのお告げがあった。さらに

「此れは是我が誓願なり、善信(親鸞)この誓願の旨趣を宣説して一切群生にきかしむべし」とのお告げを受けた。

このあと親鸞は法然を訪ね、法然の念仏の教えを受け容れることになる。この教えは分かり易くまた当時の苦しむ民衆の心の琴線に触れたので、非常に民衆のなかに広がった。しかし民衆の中には教えを曲解するものもあり、また比叡山延暦寺、奈良興福寺からの反対もあり、1207年(34歳)のとき、朝廷より念仏停止となり、越後(新潟県上越市)に配流された。1211年(38歳)のとき赦されたが、京都には帰らず、関東地方で布教活動を続けた。そして常陸の稲田の草庵で、主著「経行信証」の草稿を完成させた(1224年、51歳)。

その後親鸞の教えは蓮如（1415~1499年、84歳）に受けつがれ、信徒数は非常に増えたが、時代と共に寺院が土地・財力をもつ政治権力化し、一向一揆を起こすようになる。結局織田信長に石山本願寺の戦いに敗れ、また徳川時代になると、その体制に組み込まれる。キリシタン禁制とともに、寺院は人々の登録を受け付ける「寺請制度」に組み込まれ、葬式仏教の道をたどることになる。

明治時代になって、本願寺で、親鸞の信仰の息吹をしめす「嘆異抄」が発見され、日本の思想界全体にも大きな影響を与えた。しかし「嘆異抄」の内容は教団の組織を危うくするような危険思想をもっており、蓮如はこれを秘密文書とすることを、奥書に書き留めている。これより見ても、正しい教義を伝えることの難しさがわかる。

鎌倉時代には、浄土宗の他に、日蓮宗・禅宗が始められ、日本文化の中で、それぞれ特徴のある役割を担っている。

中国を通じて伝わった仏教は、漢字を用い漢字の概念を使用するという制約はあったが、社会秩序、教育文化、医学、芸術、生産、治心、修身の領域で、日本文化に大きな影響を与えた。しかし時代と共に、政治法律、学校、病院、公共事業が整備され、宗教の守備範囲は、小さくなってきている。しかし真の心の平安と生き生きとした生の息吹を人々にあたえるという宗教本来の勤めは、ますます大きくなってきているように思われる。

### 3 般若心経の世界

日本の仏教をあえて分類すると、般若心経を大切にす宗派と浄土三部教を大切にす浄土教の宗派に分けられるのではないかと思われる。般若心経は本文 266 字の短いお経であるが、その短さに拘わらず、仏教の真髄を伝えているので、広く読誦され、また写経されている。その内容は抽象的で理解しにくい、一言で言えば次のようになると薬師寺管長高田好胤は述べている [4, p.5]。

「かたよらないところ、こだわらないところ、とらわれないところ、ひろく、ひろく、  
もっとひろく——これが般若心経」

般若心経は仏教のなかではもっとも新しく、ヒンドゥ教の影響を強く受けた密教とともにもたらされたものである。そしてものごとを全体として捉えることを志向しており、日本での西田哲学とも繋がっている。

しかし般若心経は判じ物のようで、大変分かりにくいお経である。分かりにくい理由の一つは伝えようとする概念が中国語の漢字で表されないため、梵語（サンスクリット、真言）をそのまま用いているためでもある。この訳にはクモラジュ（鳩摩羅什、350~409年）による旧約と玄奘三蔵（602~664年）による新約がある。

この経には「摩訶般若波羅蜜多心経」という経題がついているが、この経題がこの経の本質をよく表していると言われる。至道無難禅師（17世紀の日本の禅者）は、老尼のために般若心経一句一句に片仮名で注釈をつけたが、最初の「摩訶」に対して、「摩訶ハ大ナリ、身ナキヲイウ」としている。摩訶は「超越的無意識実在」で、すべて「ものをものたらしめるいのち」である。あるいはすべての存在の原点である「空」のかたちともいえる。

次に「般若」については「般若ハ何モナキ所ヨリ出ルチエヲイウ」としている。「般若」はパーリー語のパンニャーを音写したもので、「知恵」あるいは「般若の知恵」と訳される。現代人の持っている単語の中で探すと、さしあたり「理性」、それも深い意味での理性といえる。「般若は仏母(仏の母)」といわれるくらい、すべての仏教思想を生み出す基盤で、すべての存在の根源という意味での理性である。釈尊の教えによれば、すべての存在の原点は「空」である。そして「空」を理解できるはたらきが「般若の知恵」である。

これに続く「波羅蜜多」について、無難禅師は「波羅蜜多ハ、マカヨリ出ルチエハ、イツク（いづく）ニモ滞らず止まらぬ也」といっている。「波羅蜜多」は梵語のパーラミータの音写で、仏道を修める者が実践すべき徳目で、次の六徳目、「布施」「持戒」「忍」「精進」「禅定」「般若の知恵」である。またこの徳目を実践して「さとりの」岸に到達できることから、「彼岸に到れる状態」も意味する。

般若心経の内容は「摩訶般若波羅蜜多心経」という経題に尽くされているといわれている。無難禅師は経題について説明したあと、本文の前に「是ヨリ末ハ註也」すなわち「これからさきは、『摩訶般若波羅蜜多心経』という経題の意義を説明した文章に過ぎない」とはっきり言い切っている。

したがって般若心経の立場を、キリスト教の言葉で表現すれば、「主」は「摩訶」、聖霊は「般若」、「戒め」は「波羅蜜多」になるのではなかろうか。そしてこの立場は次の今様歌で美しく表現されている。

大品般若は春の水 罪障氷溶けぬれば、  
満法空寂の波たちて、真如の岸にぞ寄せかくる。[12,p20]

#### 4 浄土教の世界

浄土教は、般若心経の世界とは全く異なる大乘仏教（北伝仏教）の流れである。浄土教では基本の経典として、「無量寿経」「観無量寿経」「阿弥陀経」を選択している。とくに無量寿経は教義の中心であって、阿弥陀如来の誓願が私たちの救いの根源であることを述べている。観無量寿経は王子に背かれ、幽閉された母后が阿弥陀如来の誓願により救いに入

るという物語である。また阿弥陀経は阿弥陀如来のいます極楽浄土の美しさを歌ったものである。

浄土教の真髄は、親鸞上人が主著「教行信証」のなかから選び出した正信偈 [付4]のに生き生きと表されている。その信仰の根元は正信偈の「弥陀章」に次のようにのべられている。

「阿弥陀如来は、法蔵菩薩の形で修行を重ねているとき、諸仏が浄土に生まれる因（たね）と、国々の善悪の様子を見通して、一切の衆生を救おうという、誓いを立てられた。さらにわが名を十方世界におしひろめて信ぜしめようと重ねて誓われた。その誓いがすべての人に行き渡るようにと光を放ち一切の群生はその光を受けた。そして一切の群生は、その至心信樂の心を因とし、阿弥陀如来の誓いにより救われるのである。」

この誓願は「無量寿経」によると48条ある誓願のなかで、第18番のもので、一般に「第18番の誓願」と呼ばれるものである。

「たとひ我佛を得んに、十方の衆生、至心に信樂して我が国に生まれんと欲し、乃至十念せん、もし生まれずば、正覺をとらじ。」

意識「たとえ私が仏の悟りを得ても、あなた方世界の人々が、心をこめてわが国に生まれようとして、思いをこらすであろう。しかし生まれることができなければ、正覺をとらない、すなわちあなた方の側にいつもたって、いつまでもあなた方を支え続けましょう。」

この第18番の誓願を根拠として、阿弥陀如来を至心に信樂することが、救いに至っている。現在でも得意芸のことを「おはこ、18番」と呼んでいるが、これは第18番の誓願からきたもので、現代もこの言葉が使われているのは興味深い。

ここで、法蔵菩薩の誓願をイエスの犠牲に対応させると、浄土教はキリスト教と大変似たものになることがわかる。ロシア正教のニコライ（1836～1912年、76歳）は、1961年25歳で函館のロシア領事館に赴任した。日本文化に暖かい眼を持ち、日本語と古典にも精通していた。とくに底辺の日本の庶民に関心をもち、その層への伝道に熱心であった。また新島襄とは日本語と英語を教えあっている。ニコライは1869年ロシアの雑誌に発表した日本観察記の中で、浄土真宗について解説し、門徒宗の教えに接すると「驚かずにはいられない。寺に入って長い説教を聴いているうちに、キリスト教の説教を聴いているような気がしてくる」と書いている。彼が聴いたのは後に英国人学者ジョン・ミルンの妻になった堀川とねの父君堀川乗経の説教だった。

浄土教では、「主」は阿弥陀如来、「聖霊」は信心となっている。ここまではキリスト教と同じである。しかし「戒め」はキリスト教では「愛の業」であるのに対し、浄土教では「称名念佛」すなわち仏の名を声をだして唱えることとなっているのが、大きな違いである。この差がその後の歴史上の働きでの差になったのではなかろうか。浄土教では、神秘主義に至る「異安心」、倫理をないがしろにする「信心ばかり」などの異端に苦しめられる。とくに親鸞は異安心を唱えた息子の善鸞を 1256 年、83 歳のとき義絶するというような苦しみを味わっている。「愛の業」を忘れるとき、キリスト教でも同じような悩みが起こることとは、パウロの書簡でも色々なところで指摘されている。

親鸞上人の教えは、苦しみに悩む人々に対して、大きな救いとなる。筆者の従姉（西村 たつ子）で、むかし盲腸炎の手遅れで、不幸にもかわいい盛りの小学生で亡くなった方がいる。自分の死期を悟った孫娘のために、筆者の祖母（真鍋でん）が阿弥陀如来の画像を見せ、極楽往生の話をしたところ、「ありがたいのう、うれしいのう」といいながら、静かに息を引き取った。そして両親も、これに目覚めて信仰の道に入ったという。この話は筆者の子供時代での浄土教との出会いである。

何れにせよ浄土教がキリスト教と似ていることを、不思議に思うこともあるが、当時の文化交流の実態から考えれば当然かも知れない。イエス・キリストの十二弟子の一人トマスはインドまで伝道し、そこで殉教したと伝えられている。またネストリウス派キリスト教は、景教として唐に渡来し、七世紀から十二世紀にかけて、中国で栄えた。八世紀には日本にも伝えられている。

## 5 神道・儒教・やまと教

仏教は「永遠の命と慈悲の心」など「心」に焦点が当てられている結果、「創造と生の営み」や「社会秩序と倫理」については、神道と儒教の助けが必要になる。これらをまとめてキリストと同じ守備範囲を持つ宗教体系、仮に「やまと教」と呼ぶものになると思われる。

神道は、縄文時代すなわち日本人が文字を持たない時代から受け継がれてきた、ある文化ではないかと思っている。戦時中の国家神道は論外としても、神道に教義を取り入れ、宗教化する試みは、教派神道で色々なされているが成功しているとは言えない。むしろ古事記の世界、万葉集の世界を全体として、そのまま受け容れる方が適切ではないかと思われる。

神道では「おてんとさま（お天道様）」と親しみを込めて呼ぶ、太陽を中心としている。恵みの太陽が、光と雨を惜しげもなく人々に与えて、作物を生長させ私たちの生命をつな

いでいる。そしてこの「おてんとさま」は、私中の命とも深くつながっていて、心の中から、「ぼかぼか」暖めているというようなイメージではないであろうか。また神社の森に対すると、その巨木の迫力に圧倒され、自分が永遠と繋がっている事を深く感じる。西行法師が伊勢神宮で詠んだ

「なにごとの おわしますかは 知らねども かたじけなさに 涙こぼるる」

のように、和歌でしか表現できない世界かもしれない。しかしあえてキリスト教と比較すると、「主」は「おてんとさま」、「聖霊」は「真心」、「戒め」は「自然との調和の中での謙虚な生きかた」になるかも知れない。

儒教には、政治・社会体制の安定化を目標にした朱子学の他に、陽明学がある。陽明学では、まず人の心にある「良知」と呼ばれる良心を大切にす。これは貴賤にかかわらず万人が心の中にもつ「道徳知」である。また「知行合一」として、知ることと行うことは一体不可分として、実践を伴わない「知」は無意味としている。「知は行の始めにして、行は知の成なり」である。また「万物一体の仁」とその「良知との結合」を説いた。すなわち人を含めて、万物は根元は同じと考え、自他一体とみなし、それはさらに普遍的な「良知」とも繋がるものであると考えた。さらに「事上練磨」を唱え、読書や静座よりも、日常の生活・仕事のなかで良知を磨く努力をしなければならないと説いた。

陽明学は、知識に加えて、宗教性と行動を重んじ、正義・平等・愛の業を重視している。日本で力のあった儒教は、この陽明学であって、中国や韓国では滅びてしまっており、明治時代に日本より逆輸出しといわれている。これをキリスト教と比較すると、「主」に相当するものは「万物と良知の根源」、「聖霊」に相当するものは「良知」、「戒め」に相当するものは、「良知に基づく日々の生活と実践」ということになるであろう。

このように神道と儒教が仏教に加味されて、日本には大変安定した倫理宗教体系ができあがったものと思われる。次に内村鑑三が「代表的日本人」で紹介した 5 人の日本人、西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮上人の中から、その人生の生きかたを紹介し、参考に供したい。

西郷隆盛は、苦難の中にも、英知と忍耐により、明治維新の大業を成し遂げた。寛容な政策により、敵方の幕府と真の和解をはかった。また終始謙虚で、質素な生きかたを貫いた。「敬天愛人」は彼のモットーであるが、これは聖書の戒めと同じである。

イエスは言われた。『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。』

(マタイによる福音書 22 : 37~40)

「敬天愛人」の言葉は、クリスチャンだった蒋介石のための、蔣中正記念館（台北）にも掲げられているし、またクリスチャンの金大中から、小渕総理に贈られた書にも書かれている。「敬天愛人」が、漢字文化圏ではイエスの二つの掟と同じように用いられている。西郷隆盛の思想をキリスト教的に表現すれば、「主」は「天」であり、「聖霊」は「誠心」であり、「戒め」は「愛の実践」となるであろう。

二宮尊徳はもともと「やまと教」の人だといっても良いかもしれない。生活を犠牲にするほど、深い慈悲心の父母の資質を受け継ぎ、少年のとき旅僧の「観音経」に感動するような豊かな感受性を持っていた。また成田山に参籠もしている。儒教の深い教養を身につけたが、書物よりも日常の生活・仕事のなかから、生きた学問を学んでいた。次の道歌はよく知られている。

「声(おと)も無く 臭(か)もなく 常に天地は 書かざる経を くり返しつつ」[p.110]

宗教については、「神道は開国の道」「儒学は治国の道」「仏教治心の道」と説き、自分はこの三道の正味をとって、人間社会に無上の教を立てた。これが「報徳教」なのである。また門人の質問にたいし、その匙加減は、神道一匙、仏教と儒教は半匙づつと答えている[10 上、p.36]。なお二宮精三氏（尊徳直系の子孫）の話では、二宮家は曹洞宗で、その家の伝統を守っておられるとのことである。

二宮尊徳は浄土教ではなく、禅宗を受け容れておられるようである。あえて先生の教えをキリスト教的に表現すれば、「主」は「一円一元の大極」、「聖霊」は般若心経に示されている「般若」、「戒め」は「社会のために有益な仕事を続けること」となるのではなかろうか。

中江藤樹は、日本での陽明学の始祖といわれている。その思想はキリスト教に大変近く[21]、実際林大学頭は、藤樹をクリシタンとして非難している[22]。現在でも、藤樹書院は周辺の老人会の方々に守られ、毎年命日には儒礼による記念祭が行われていることより見ても、その感化の大きさが偲ばれる。

このほかにも教派神道の流れでは、日本的な倫理の実践活動を続けているグループとして丸山敏雄（1892~1951年、59歳）の倫理研究所がある。ここでは「主」としては日本の伝統的な「親、祖先、神、佛」を「主」とし、日本で普通に理解されている「誠心、純情」を「聖霊」として、「明朗、愛和、喜働を標語とし、具体的で、きめの細かい愛の実践により、愛和の家庭をつくること」を「戒め」としている。

やまと教は、日本にあるだけでなく、西欧にもあるのではないかと思われる。万有引力を発見したニュートンも三位一体の神を信じていなかったといわれる。日本では幸福論で有名なヒルティも伝統的な教会には批判的であった。キリスト教国のドイツの本屋でヒルティの著作を探したとき、隅の方でしかも要約本しか見つけられなかったことにショックを受けたことを覚えている。シュバイツァについても同じようなことが言えるのではなからうか。

## 6 むすび

以上仏教とキリスト教について、筆者の考え方をまとめてみた。キリスト者は仏教を鏡とすることにより、自分の姿をより正しく知ることができるが、同様のことは仏教者にもいえる。宗教を比較するとき、往々にして教義での言葉の表現の比較に陥り、その真意を汲み取ることができない場合が多い。このようなとき、その生きている姿そのものをよく観察すれば、その真意に達することができるのではなからうか。

プロテスタントのキリスト教は、伝道 150 周年を迎えるが、その発展は遅遅としており、2004 年現在で日本の総人口の 1%、そのうちカトリックが約 65 万人、プロテスタント諸派が 45 万人、そのなかで最も信徒数の多い日本基督教団で約 10 万人である。

このことは韓国とよく比較される。韓国では仏教徒 25% に対し、プロテスタント 20%、カトリック 7.4% となっている。その理由としては、韓国では李朝が朱子学の儒教を中心にして、徹底的に仏教を弾圧した結果、日本のように安定した「やまと教」持たなかったためではないかと筆者は考えている。「やまと教」は大変優れた思想と実践であり、明治時代のキリスト者が非常に力があつたのは、キリスト教をやまと教の上に接木したからではないかと思う。実際、内村鑑三の「代表的日本人」や新渡戸稲造の「武士道」は世界の知識人に広く受け容れられた。

ユダヤ教はパレスチナ問題で、またキリスト教はイスラム諸国との対立で、問題を抱えているとき、「やまと教」は解決法の一つのヒントを与えるとではないかと思っている。また日本でキリスト教の伝道を真剣に考えるならば、「やまと教」との関係は避けられない問題になる。日本の伝統の象徴である、「伊勢神宮」「都の天皇」と、日本基督教団はどう向き合うのが真剣に問われているのではなからうか。

### [付 1] 梁塵秘抄

梁塵秘抄は平安時代末期後白川法皇(1127~1192 年、65 歳)の御選により、今様歌を集めたものである。後白河法皇は堅実な君主としては危ぶまれていたようであるが、平清盛と

同じような新しいものが好きだったので、平安後期に流行った今様歌にのめりこんだようである。この頃では寺院は荘園と僧兵をもつ巨大な政治勢力になっていて、民衆の救いからは遠く離れた存在になっていたのであろう。梁塵秘抄には真実の宗教心が素朴な形で表現されている。

佛は常にいませども、現（うつつ）ならぬぞ、あわれなる。

人の音せぬ、暁（あかつき）に、ほのかに夢に見え給ふ。[12,p16]

仏は様々いませども、まことは一仏なりとかや、

薬師も弥陀も釈迦弥勒も、さながら大日とこそ聞け。[12,p16]

阿弥陀仏（ほとけ）の誓願ぞ、かへすがへすもたのもしき、

ひとたび御名をとらふれば、仏（ほとけ）に成ると説いたまふ。[12,p16]

大品般若は春の水 罪障氷溶けぬれば、

満法空寂の波たちて、真如の岸にぞ寄せかくる。[12,p20]

## [付2] 二宮尊徳

二宮尊徳（1787~1856年、69歳）の事跡はよく知られているが、文部省の指導のため実像が歪められているように思われる。しかし文献[9][10]や尊徳の日記からその生活を再構成した研究[18]より、真実の姿が浮かび上がってくる。

尊徳は貧しい家に育ったと考えられているが、実際は栢山村組頭の分家に生まれており、当時には珍しく両親とも学問ができた人で、また心の優しい人であった。他人に施すことで財産を減らして行ったが、父親の病気のための薬代と洪水の被害が一家を貧乏のどん底に落したのである。しかし尊徳は祖父の健康な働きと、父母の教養と優しさを豊かに受け継いでいたのである。

尊徳の教えは「至誠、勤労、分度、推譲」という言葉に集約されている。天は恵み深い方であるが、その天の徳に積極的に応える心を至誠といい、その心の表現が勤労である。そのとき、支出はいかなる場合も収入以内にするのが分度であり、その結果の余分を将来のために、あるいは今財を必要としている人に譲ることが推譲である。したがって一言で言えば、「倫理に根ざした資本主義経済」である。

尊徳の教えは書物ではなく、実地に行なって成果がえられるかにかかっている。至誠の心を「勤労」におきかえるときの、色々な工夫のなかに、その真価がある。尊徳が農業知

識に詳しく、また人の心の機微をよくつかんでいたことは、よく知られている。しかしそれ以上に科学的知識に優れていたことも、注目に値する。尊徳は記録を大切に、数値データを重んじた。算用数字がなく、漢字でしか数値表現の方法がなく、算盤しか計算法がないときこれだけの記録を残したことは注目に値する。

尊徳は 1805 年（18 歳）のときから、生涯を通して欠かすことなく家庭内の記録としての出納帳を書き続けた。これは家計簿と日記を合わせたものである [18,p.9]。また一反の土地を毎年 1.5 倍にすることを 60 年間続ければ、六十年間に 24 億 5048 万 2253 町歩なるという計算をしている [9 上、p.34]。これは  $0.1 \text{ 町} (1 \text{ 反}) \times 1.5 \text{ の } 59 \text{ 乗} = 2451231248 \text{ 町}$  と計算され、当時これだけの精度で計算ができていたことは驚きである。

また「数学者の解と運算とがなければ世間の用務が足せない」という言葉を残している。社会で大切なものとして「天地の慈しみ」「神仏の擁護」「帝威の厳正」「農民の耕作」「学校や著書」「書家の教導」「医家の診療」「数学者の解と運算」「工匠の勤労」「商人の運送」「諸職人の作業」と列挙したなかに出ているものである [23,p.28]。数学は科学の基礎であり、尊徳がこれに言及していることよりも、科学的精神を重視していたことが分る。また残されている仕法書（再建計画書）、たとえば「藤曲村立て直し仕法雛形」、の記述が詳細で具体的であることに驚かされる。

尊徳の日常生活を新井恵美子の研究より紹介してみよう。尊徳が一家を再興したのは、1810 年（23 歳、数え年 24 歳）のときで、一町四反五畝二十歩（14,567 平方メートル）の田畑を取り戻し、失った生家を新築した [18,p.30]。さらに土地を買い続け三十歳のときには三町八反（38,000 平方メートル）の土地持ちになっている [18,p.39]。生活に余裕ができると、豊かな文学的才能を生かして、俳句を始めたがこれは、19 歳の年だけの短期間で終わっている [18,p.34]。後に人生の指導者として人にもものを伝授するとき、道歌（教訓の和歌）作ったが、この経験が生かされたと思われる。

また 23 歳のとき、四泊五日の旅で富士登山している。また同じ年に伊勢講の仲間と共に江戸から京都、大阪、四国に渡って琴平参り、高野山、吉野、奈良をめぐるやっとなら伊勢にたどりつく。これは 50 日に近い大旅行であった [18,p.42]。23 歳のときこのような旅行ができるのは、生活に余裕があったことと、好奇心の強さを示すものではなからうか。

その後尊徳は小田原藩の筆頭家老服部家に奉公するようになった（1812 年、25 歳）。そして 30 歳（1817 年）で 12 歳年下のキノと結婚し、二年後（1819 年、32 歳）で長男徳太郎が生まれたが、生後 15 日で死去した。その後尊徳は服部家で、経済立て直しに専心するが、キノはそのような特異な人生ではなく、普通の穏やかな生活を望んで折り、離婚という結

果となった。しかし尊徳は自分の生きかたに賛同していた波子と、1820年(33歳)に再婚した。波子は1805年生まれで、尊徳より18歳若い。そして1821年(34歳)に長男弥太郎が誕生した。尊徳は1822年(35歳)で服部家の経済立て直しに成功した。生活も裕福になっていて、三浦半島へ七日間の旅行などを行っている。また波子・弥太郎にも細やかな愛情を注いでいる。

小田原藩主大久保忠真は、服部家の経済立て直しに成功した、二宮尊徳に興味を持ち、栃木県の桜町の再建を委ねた。忠真はその成功をみて、やがて小田原藩の再建も考えていたようである。尊徳は1823年(36歳)に自分の家・家財・土地を売り払い、桜町に赴任する。この時尊徳は士分に取り立てられ、高五石二人扶持(年間12.5俵+9俵=略20俵)と現地手当で50俵を支給された[9上、p.45]。これは総額70俵で、28石(略34両)で略170万円になる。

尊徳は苦心して得た土地・家と家財道具を売り払い、栢山を後にしたのである。尊徳の所有地は3町8反余であったが、その半ばを72両余(略360万円)で売り払い、残りを村民に貸し付けている。家財道具は6両余(略30万円)で売っている[9上、p.45]。

1823年3月13日桜町に向け出発した。駕籠一挺に妻波子と長男弥太郎をのせ、馬2頭に家財道具を積んでの旅であった。その日は藤沢に泊まり、翌日14日は江ノ島・鎌倉を見物し、15日には江戸に着いている。江戸では波子のために羽織紐72文(720円)、半襟2朱8文(5080円)、ぞうり32文(320円)の買い物をしている。26日に江戸を出発し27日に桜町に着いた。15日の旅であったが、江ノ島・鎌倉観光や江戸での買い物など、家族のための心使いを忘れない家族的な尊徳の側面が見られる[18,p.104]。

桜町での尊徳の努力はよく知られているが、家庭的な面について少し見てみよう。1824年7月17日(尊徳37歳)に長女ふみが誕生している。そして村の状況を見るための廻村に家族を連れて行くことにより、仕事と家庭を両立させている。その後尊徳の仕事は、小田原から来た役人の妨害にあい、困難に直面するが、1829年(42歳)に成田不動尊に断食誓願の後、村民協力を得、1831年(尊徳44歳)には桜町復興を完成した。この間子供の教育には心を配り、贅沢なほど当代一流の学者を師に選んでいる。また長女ふみが絵に優れた才能が有ることを発見し、一流の画家大岡雲峰の弟子にしている。

また1830年正月(尊徳43歳)には夫人波子に小田原の実家への旅行をさせている。長男弥太郎、長女ふみを伴い、江戸での滞を含めて90日間の大旅行で15両2朱(略75万円)使っている。そのときの出納帳に詳細が記述されているが、ゆとりのある旅で、知人へのお土産や接待に十分お金を使っている[18,p.141]。また1839年(尊徳52歳)には、15

歳になった娘ふみのために、略1両（略5万円）の帯を買い与えている[18,p.141]。

このように尊徳は勤儉貯蓄一方の人ではなく、収入以内に支出を抑えた上、剰余の資金を上手に使い、自分のためにも、また周りの人のためにも、お金を生かして使ったといえる。お金の使い方に非凡の才能を持ち、また健全な消費も大切なことをよく知っていたのである。実際子供のために、一流の学者・画家を師を選んだことは、このような人生観の表れではなかろうか。

### [付3] 中江藤樹

中江藤樹（1608~1648年、40歳）は、日本の陽明学の始祖といわれているが、その教えは、身分の上下を超えた平等思想に特徴があり、武士だけでなく商・工・農の人々まで広く浸透し「近江聖人」と呼ばれている。中江藤樹が郷里に戻ったのは1634年（26歳）で、その後1639年（31歳）に私塾「藤樹書院」ひらき、本格的に教育活動に従事したの僅か9年である。それにもかかわらず、深い影響を歴史に残したことに感銘をうける。なお中江藤樹の年齢は文献では数え年になっており、本論文では年末での満年齢すなわち数え年より1年低いものを用いている。文献の年齢は数え年なので、注意して頂きたい。

藤樹は滋賀県高島郡小川村で、農業中江吉次の長男として生まれたが、8歳のとき米子藩主加藤家の150石取りの武士である祖父・徳左衛門吉永の養子となり、米子に赴く。1617年（9歳）のとき、米子藩主加藤貞泰が伊予大洲藩（愛媛県）に国替えとなり祖父母とともに移住する。1622年祖父が死去し、家督100石を相続した（14歳）[20,p.7]。

藤樹は幼少より学問に優れ、1617年（9歳）の記事で祖父はその優れた才能を褒めている[20,p.8]。この年に藤樹は「大学」を読み、志を立てたといわれている。しかし藤樹は求道心とともに報恩の心がつよく、食事のさいにつねに「父母の恩・祖父の恩・君の恩」を思っ忘れてなかった。この頃は、藤樹は朱子学を深く信奉し、1624年（16歳）のころ「四書大全」（朱子学の基礎、大学・中庸・論語・孟子）を入手し独学を続けた。19歳で藤樹は聖人となるための学問「聖学」に志し、同志2,3名と大学を講明した。24歳のとき近江の母のもとに帰省して、大洲とともに生活することを奨めたが、母は近江に止まることを望んだので、止むをえず26歳（1634年）のとき藩を辞職して郷里に帰った。なお1632年将軍家光の時代になると、キリシタンの迫害が熾烈残酷を極めるようになった。1633年には伊予出身の修道士が火炙りに処せられなどのことがあり、難を避けて急に近江に帰ったという説もある[21,p.145]。

その後27歳28歳のころは、易学を研究している。そして29歳のとき結婚した。妻の容貌が大変みにくかったので、母は離婚を迫ったが、藤樹は従わなかった。30歳頃医学を勉

強している。31歳のとき藤樹塾を開いた。32歳のとき「孝経」を味読し、毎朝拝誦している。また「太乙神」を祭る。32歳のとき「翁問答」を執筆する。33歳のとき伊勢神宮に参詣する。このようにして外面的形式を追う受動的な生きかたよりも、自己の本性に忠実な内発的自由「真性活発の体」を求める生活がまさるといふ明白な自覚に達した。

34歳のころはもっぱら「孝経」を講義して、つねに「愛敬」の二字をかかげて、「心の本体はもともとこれ愛敬的」と述べ、「この心を認めて存養して失わざるときは、聖人の心なり」と言った。35歳のとき女性のために、仮名文の鑑草を出版させた。

藤樹は36歳のとき陽明全集を入手し、自分と同じ考え方であることに感動した。しかし藤樹の思想は王陽明の思想よりも宗教的であり、力点の置き方が異なるが、王陽明の思想を簡単に述べて見よう。王陽明(1472~1529年,57歳)は四つの命題「心即理」「知行合一」「致良知」「事上磨錬」を提案している。「心即理」とは心の本来のすがた、すなわち私心のない心が「理」であるという主張である。「知行合一」は知ることと行なうことは同じことで、行いの伴わない場合は本当に知ったことにならないという主張である。「致良知」自分の心に本来存在し、また万物のなかにも普遍的に存在する「良知」とよばれる存在の働きを自分の行為のなかに最高度に実現することである。「事上磨錬」とは実践を通じて人格を磨いていくことで、書物の知識のみにたよることへの批判である。

その後藤樹は自分の思想に磨きをかけ、日本陽明学の基礎を築き、40歳(1648年)に亡くなった。藤樹が開いた日本陽明学がその後日本の思想に大きな影響を与え、明治維新の土台にもなったことは、井上哲次郎著「日本陽明学派之哲学」[24]に詳しく述べられている。藤樹が最後に到達した思想はキリスト教そのものとも言ってよく、そのような立場で見ている、桜美林学園創設者、清水安三の著書[21]にしたがって述べてみよう。

宗教を比較するとき、キリスト教の「主」「聖霊」「戒め」に相当するものをどう考えているかを比較すると分り易い。先ず「主」について考えると、藤樹は神を表す言葉として色々用いているが、最終的には「太乙神」を用いている[21,p.15]。「太」は極めて多きこと、「乙」は未だ分かれざることを意味する。「一」が「二」に別れる前は「乙」と言う字になるからである。「神は聖愛を以って、万物を造化し、主宰し命ずるところの至善なる人格的霊である」というのが藤樹の考え方である。その神は「無限」「絶対」「遍在」「全知全能」「不変不易」「内在にして超在」で、体験によって知ることができるとしている。これはキリスト教の「父なる神」「主」と同じである。

次に藤樹は「良知」と言う言葉で、「聖霊」を理解しているようである。キリシタンの言葉に次のような文がある[21,p.51]。「デウス、人を御作りなされし初めより、面々生まれ付

きによしあしを覚ふる心の精徳を、こんしえんしゃと号して、師匠と渡し給ふ事は、常々悪を退け、善を行へと心をおこし勸むべき為なり。去れば此のこんしえんしゃは善人の為め守手、師匠なる如く、悪人の為には心の責手、訴手、呵責の人と成て、悦びの中に苦しみを受ける者なり」。藤樹はこれと同じように「良知」を理解していることは、つぎの引用で明らかである。

「意欲の魔障重き時は、良知の主翁権を失ふ」

「良知惺々として過を悔る心切なり」

「善念能慮は良知の本覚なり」

「悪を御にくみ候は、善悪の良心にて一段能御座候」

「良知は是非の鏡にて善悪に暗からぬ物にて候」

最後に「戒め」としては藤樹は「愛敬」を大切にしている[21,p.80]。

「上帝の事る処の心即ち愛敬」

「万民皆天地の子にして、我も人も人間の形あるほどの物咸く兄弟なり、元来骨肉同胞の断なればいづれを尊び、いづれを卑しみ、何れを慢り、何れを軽んずべき道理一つとしてなし」

藤樹は言葉だけではなく、自分も愛の実践者であった。もの覚えの悪い大野了佐に門人が呆れるほど辛抱強く教え、ついに医者として一人立ちさせた話は有名である。そのため分り易い医学の教科書をつくっており、村民の病気の治療も行なっている。年譜に次のような記述が残されている。

「家窮して貧しといえども、これに居て裕如たり。余粟あれば村民に振貸す。

すべて親戚故旧、愛をつくさずと云うことなし」

また愛を「徳愛」と「欲愛」にわけ、これはキリスト教の「アガペイ」と「エロス」に対応する。

愛の心を持ち続けるため、藤樹は「孝」を大切にしている。「孝」の狭い意味は「親を養う、仕える」で、この解釈が当時も現在も、日本で一般に用いられている[20,p.126,128]。しかし藤樹は「孝」を真の「愛・敬のこころ」を起こさせる宇宙の原動力のように捉えており、キリスト教のことばで表現すれば、「主の恵み、聖霊」となるのではなからうか。これを豊かに受けているときは、儒教で示す色々な徳「孝・忠・仁・慈・悌・恵・順・和・信」は自然と発現できると藤樹は述べている。

藤樹はこのような深い意味での「孝」を体得するため、「誦経威儀」を毎朝守っていた。先ず身を調べて、静座・黙想し、現在から逆に今までを思い出していく。子供のとき親に愛されたこと、自分が母の胎内からでて産声を上げたときのこと、さらに母の胎内にいたとき母と同じように呼吸していたことを思い起こす。このようにして自分の命の根源とし

ての母を覚え、さらに両親から先祖にさかのぼって、ついにすべての命の根源にふれることができる。このように自分の命の根源に触れたとき、人は本当の「愛」にたっすることができるとしている。藤樹が「近江聖人」と人々に慕われてきたのは、この「愛・敬」の力によるものであろう。

#### 【付4】 親鸞上人と正信偈

親鸞上人は大変理屈っぽい方で、その主著の「教行信証」では、経典の引用は精緻を極め、現代の科学論文を読むような感じがする。「正信偈」は教行信証の行巻の末尾に所収の偈文である。浄土真宗の要義大綱を七言 60 行 120 句の美しい偈文にまとめている。蓮如上人により、僧俗の間で朝暮の勤行として読誦するよう制定され、現在も行われている。

正信偈は大きく二つの部分によって構成されている。「総讃」の 1 行に続く前半は、「依教段」と言われ「無量寿経」に依って明らかにされている、浄土往生の正因は信心であり、念仏は報恩行であることを説明し讃嘆している。後半の部分は「依釈段」と言われ、インド・中国・日本でこの教えを正しく伝えた七高僧の業績・徳を讃嘆している[3][16]。

「総讃」 「帰命無量寿如来 南無不可思議光」 1 行

永遠の生命、不可思議の光に皈依します。

「依経段」 21 行

「弥陀章」 「法蔵菩薩因位時～必至滅度願成就」 9 行

阿弥陀如来は、法蔵菩薩の形で修行を重ねているとき、諸仏が浄土に生まれる因（たね）と、国々の善悪の様子を見通して、一切の衆生を救おうという、誓いを立てられた。さらにわが名を十方世界におしひろめて信ぜしめようと重ねて誓われた。その誓いがすべての人に行き渡るようにと光を放ち一切の群生はその光を受けた。そして一切の群生は、その至心信樂の心を因とし、阿弥陀如来の誓いにより救われるのである。

「釈迦章」 「如来所以興出世～是人名分陀利華」 10 行

釈迦如来が世に現れた理由は、ただ阿弥陀如来の海のように広い本願を説き広めるためでした。悪にまみれた今の世の人々よ、如来のこの真実の言葉を信じなさい。そうすれば、煩惱のあるままで、救われるのです。すべての川が海に流れこんで、一つの塩味になるようなものです。救いの光は常にあなたを照らしています。たとえ貪り憎しみの心の雲がこの光を遮っているとしても、雲の下はけっして真っ暗にはなりません。阿弥陀如来の誓いを受け容れる人は、真の知恵の人で、泥沼に美しく咲く蓮の花です。

「結誠」 「弥陀仏本願念仏～難中之難無過斯」 2 行

しかし弥陀仏の本願を求める念仏を受け容れることは大変難しいことです。

「依釈段」 38行

「総讚」 「印度西天之論家～明如来本誓応機」 2行

インド・西域・中国・日本の高僧は、阿弥陀如来の本願が人々の根機相応であることを示されました。

「龍樹章」 「釈迦如来楞伽山～応報大悲弘誓恩」 6行

釈迦如来は南天竺に龍樹大士が世にでることを予言されました。龍樹大士は弥陀如来の救いの本願と誓いを深く心に留めるとき、そのまま救いにはいと説かれました。そしてこの大悲の誓いに感謝して、阿弥陀如来の名前を唱え唱えることをすすめました。

「天親章」 「天親菩薩造論説～入生死菌示応化」 6行

天親菩薩は浄土論をつくり、一切の人々を救済するために、一心帰命ということを彰されました。名号のいわれを信ずれば、蓮華蔵世界ではただちに救いに預かり、また煩惱のこの世では、衆生利益をするであろうと述べられました。

「曇鸞章」 「本師曇鸞梁天子～諸有衆生皆普化」 6行

曇鸞大師は梁天子より鸞菩薩と礼拝されていました。若い日に浄土の聖典を授かり、仙経を焼き捨てて、浄土門に帰依しました。罪惡に穢れ果てた凡夫も、信心が起これば、この世それ自身が救いであり、また浄土に往生したのちは、そこより一切の衆生を済度することができるのとべられました。

「道綽章」 「道綽決聖道難証～至安養界証妙果」 4行

道綽禪師は、聖道門の教えでは、悟りを得ることが難しいことを明らかにし、信仰による救いを教えられました。一生惡を造っても、本願の救いに出会うとき、浄土に往生して、真の救いに預かることができると述べられました。

「善導章」 「善導独明仏正意～即証法性之常樂」 4行

善導大師は仏の正意を明らかにし、善人も悪人も共に愛し、仏を信ずる心とき、救いに預かることができると説かれました。そのとき人は金剛心をうけ、喜びに満ち、自分の子の王子に虐待されても、救いに預かった韋提希夫人と同じように「喜・悟・信」の三忍をえて、喜びに満ちた悟りにいたることができます。

「源信章」 「源信広開一代教～大悲無倦常照我」 4行

源信僧都は広く仏典を研究し、安養の浄土の教えに帰依し、人々にも奨められました。極重の悪人である私たちも唯仏の名を呼び求めましょう。私たちは仏の救いの中にあり、煩惱のためにしかと見ることができませんが、仏の大悲は倦むことなく、私たちを照らしているのです。

「源空章」 「本師源空明仏教～必以信心為能入」 4行

本師源空上人は仏教に精通していましたが、善惡の凡夫を憐れまれて、浄土門を独立させ、真の教えを日本に興し、信仰による救いの大道をこの惡世に広められ

ました。輪廻の世界から抜けられないのは疑いの心に滞っているからであり、真の救いに預かるのはただ信心によるのだと教えられました。

「結勸」「弘経大士宗師等 拯濟無辺極濁悪 道俗時衆共同心 唯可信斯高僧説」 2行  
真実の教えを広められた高僧の方々は、限りなき悪にある私たちを救おうとして  
いられます。僧俗ともに一味の心になって、これら高僧方の教えを信ずべきです。

また親鸞上人（1173～1263年、90歳）は600年前に生きた聖徳太子（574～622年、48歳）を心から敬愛し、皇太子聖徳報讃の和讃を作っている。[3、p.578～580]

佛知不思議の誓願を 聖徳皇のめぐみにて  
正定聚に帰入して 補処の弥勒のごとくなり 補処：次生に佛処を補う  
救世観音大菩薩 聖徳皇と示現して  
多々のごとくすてずして 阿摩のごとくにそひたまふ 多々・阿摩：父・母（梵語）  
大慈救世聖徳皇 父のごとくにおはします  
大悲救世救世観 母のごとくにおはします  
和国の教主聖徳皇 広大恩徳謝しがたし  
一心に帰命したてまつり 奉讃不退ならしめよ

#### [付5] ヒルティの思想

カール・ヒルティ（1833～1909,76歳）はスイスの法学者で、晩年にはハーグの国際仲裁裁判所の初代スイス委員に任命されている。旺盛な著述家で、法律学、政治、歴史、社会問題、宗教、倫理等の数多くの論文や著作を公にした。日本では晩年（58～66歳）に書かれた「幸福論」3巻で知られている[14]。

彼はキリスト教的形式主義をきらい、哲学書の論理的体系づけを虚飾として斥けた。彼は常にものごとの真実を重んじ、その著作は生得の英知とまじめな体験とに裏づけされた全人格の湧出であったから、読者に深い感銘を与えたのである。

彼は「キリストの犠牲による万人の贖罪」という考えには不賛成であった。教会に所属して、礼拝と祈祷の形式に従うことではなく、個人的に、直接に神を信仰し、キリストにならって、自ら苦しみ、働き、たえず努力して一步一步神に近づくことを、信仰生活の最終目標と考えた。

「不幸は幸福のために必要である。」

「人生最大の幸福は、神の側近くあることである。」 [14、第一部、p.292]  
と言っている。また「二種類の幸福」を論じて、次のようにも言っている。

「人生のまことの補強工事とは、神のそば近くあることと仕事とである。」

その結果自然に生ずるものは、あらゆる被造物に対する愛である。」

[14、第二部、p.18]

## 文献

- [1] 石田昭義 「いまの時を生かす」 ヨルダン社、1988年
- [2] 東京大学仏教青年会編集 「仏教聖典」 三省堂、1982年
- [3] 真宗聖典編集同人 「真宗聖典」 永田文昌堂、1975年
- [4] 松原泰道 「般若心経入門」 祥伝社、1972年
- [5] 中村元、紀野一義訳注 「般若心経、金剛般若経」 岩波文庫 1970年
- [6] 山折哲雄 「空海の企て」 角川選書、2008年
- [7] 山折哲雄 「仏教用語の基礎知識」 角川選書、20xx年
- [8] 中村健之介 「宣教師ニコライと明治日本」 岩波新書 1996年
- [9] 富田高慶原著、佐々井典比古訳註 「報徳記」(上)(下) 一円融合会 1990年
- [10] 福住正兄原著、佐々井典比古訳註 二宮翁夜話(上)(下) 一円融合会 1990年
- [11] 奈良本辰也 「二宮尊徳」 岩波新書 1977年
- [12] 佐々木信綱校訂 「梁塵秘抄」 岩波文庫 1973年
- [13] 内村鑑三著、鈴木範久訳 「代表的日本人」 岩波文庫 2001年
- [14] ヒルティ著、草間平作訳 「幸福論」(第1、2、3部) 岩波文庫 1973年
- [15] 井上洋治 「法然、イエスの面影をしのばせる人」 筑摩書房 2006年
- [16] 大原性実 「正信講讃」 永田文昌道 1973年
- [17] 小泉達人 「宗教をかんがえる、キリスト教と仏教の対比を軸として」 新教出版社  
1996年
- [18] 新井恵美子 「江戸の家計簿、家庭人二宮尊徳」 神奈川出版社 2001年
- [19] 佐々井信太郎 「二宮先生道歌選」 一円融合会 1989年
- [20] 古川 治 「中江藤樹」 明德出版社 1990年
- [21] 清水安三 「中江藤樹はキリシタンであった」 桜美林学園
- [22] 林羅山 「草賊後記」
- [23] 佐々井信太郎 「報徳文献選集」 一円融合会 1994年
- [24] 井上哲次郎 「日本陽明学派之哲学」 富山房 1924年
- [25] 内村鑑三 「代表的日本人」 岩波文庫 1984年
- [26] 新渡戸稲造 「武士道」 岩波文庫 1986年